

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01217

研究課題名(和文) 日本美術の記録と評価についての研究 - 美術作品調書の保存活用

研究課題名(英文) A Study of the Documentation and Evaluation of Japanese Art: The Preservation and Use of Art Survey Reports

研究代表者

江村 知子 (Emura, Tomoko)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・室長

研究者番号：20350382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、田中一松および土居次義の研究資料のデジタル化による保存活用を実施しながら、日本美術の記録のあり方と評価プロセスを明らかにすることを目的とした。田中と土居の調査記録とその手法を比較検討しながら、この100年間にどのように日本美術は記録され、語られてきたのかを解明した。デジタル化作業と各種資料との比較・考察により、田中と土居による半世紀以上に及ぶ文化財関係業務、日本絵画の調査研究の実態を把握することができた。個々の作品研究において有益な情報が集約できるばかりでなく、数多くの作品がどのように評価・位置付けがなされ、日本美術史が語られてきたかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般的には論文や書籍などの形になったものを研究者の業績としてみなすが、本研究で扱う田中一松と土居次義は、自らの足と、手と、眼の力を駆使して勢力的なアナログ調査活動を展開し、目を見張るような質・量の調査を実施し研究基盤を形成した。両者の調査ノートはそのことを雄弁に物語る研究資料である。本研究ではアナログ資料をデジタルの特質を活かして保存活用し、未来にも活かすことを目指した。主要な調査ノートや重要な資料は、全ページをデジタル化し、ウェブ上で公開した。田中と土居の研究は主に江戸時代以前の美術作品をその対象としているが、その記録は近代資料でもある。今後、他の研究領域にも活用されることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the ideal way of recording Japanese art and the evaluation process while carrying out the preservation and digital utilization of the research materials of Tanaka Ichimatsu and Doi Tsugiyoshi. By comparing the research notes of Tanaka and Doi with their research methods, we clarified how Japanese art has been recorded and talked about in the last 100 years. By digitization work and comparing and examining the various materials, we were able to grasp the actual situation of administrative work for cultural properties and Japanese painting research by Tanaka and Doi for more than half a century. Not only it was possible to collect useful information in individual research of artworks, but it also clarified how artworks were evaluated and positioned, and how Japanese art history was talked about.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術史 日本絵画史 美術作品の評価 文化財の調査 文化財アーカイブ

## 1. 研究開始当初の背景

日本の長い歴史を通じて、多くの美術作品が形作られ、おもに伝存した作品に基づき日本美術史が形成されてきた。先学の研究により、主要な作品はその名称や時代、筆者や制作背景がある程度判明しているか、ある程度の時期・場所・作者についての歴史的な位置付けができています。一方まったく未知の作品、初出の作品を調査する場合、どのような方法でその対象にアプローチするだろうか。形状・材質・大きさ、そして何がどのように表されているのか調べ、既知の類例作品などと比較して、評価を行うのが通常の方法であろう。デジタルカメラで撮影し、他の作品と比較することも常套手段である。比較検討においては、美術作品の写真や図録、また近年ではインターネットによる検索もある程度は有効であろう。しかし戦前の美術史家は、初めて見る作品に対峙した時に、自分の眼で観察し、図様や認知できる情報を手で描き写して記録した。こうした地道な作品調査の記録が蓄積・整理され、日本美術史が徐々に形成されてきたと言える。

本研究で取り扱う、田中一松（1895-1983）や土居次義（1906-1991）による手書き調書・研究資料・写真等は、両者がその生涯にわたる業務や研究において蓄積されたもので、現在はそれぞれ東京文化財研究所と京都工芸繊維大学に所蔵されている。また相見香雨は、琳派・文人画・画譜などの日本絵画史の分野において、実証的研究を重ね、その調査記録は九州大学に所蔵されている。2018年5月から8月にかけて、「記録された日本美術史 相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」を実践女子大学香雪記念資料館と京都工芸繊維大学美術工芸資料館において開催した。100年以上を経過した資料もあるが、これらは単なる「古い記録」ではなく、何をどう捉えるか、その作品の見どころ、重要な部分を的確に示している。現代では高解像度でデジタル撮影をすれば、作品の情報が速く確実に記録できると考えがちであるが、どこが重要であるか、わからずに撮った画像は、研究者によっては見たいところ、見るべきところが記録されていない、というケースが多々ある。田中や土居の調書は、その作品においてどこが重要なのかを明確に示している。こうしたことは、彼らの美術作品に対する評価と密接に結びついている。

田中一松資料は、同氏が1983年に逝去され、当時理事を務めていた出光美術館に寄贈された。田中の調書は生前から「昭和の古画備考」とも称され、質・量ともに卓越した日本美術の調査記録であることが知られていた。2007年には玉蟲敏子氏が代表を務める科学研究費補助金研究・基盤研究B「江戸時代における 書画情報 の総合的研究 『古画備考』を中心に」の研究者らにより調査が行われ、その重要性が認識されていた。その後2008年に、ご遺族の田中一水氏および出光美術館から東京文化財研究所に寄贈を受け、整理を進めていたがデジタル化を始め、保存公開の作業が十分には進められていなかった。そして戦前の資料は酸性紙など劣化が進行しているものも少なからず存在しているため、保存修復処置も喫緊の課題となっていた。

また土居次義は、京都を中心とする寺院の障壁画調査に携わり、狩野山楽、長谷川等伯をはじめ、近世の諸画家についての多数の論考を発表し、近世障壁画研究の基盤を形成した。土居次義調査研究資料は、昭和初期から書き続けられた調査研究ノート200余冊、約15,000枚の調査写真などからなり、2009年にご遺族から京都工芸繊維大学に寄贈された。土居は文献調査に加え、現地調査による作品細部の徹底した観察に基づき画家を判別し、寺伝などで伝承される画家の再検討を行った。ノートはこれまでの研究、資料整理事業でデジタル化作業が完了しているが、資料価値の高い写真類は、デジタル化作業が未着手であり、保存と活用の観点から、画像データ化作業が必要になっていた。土居の調査研究は、『障壁画全集』（美術出版社、1966-72年）などにその成果がまとめられているが、研究上重要でありながら、紙面の都合で掲載できなかった写真も多い。現状ではその写真利用は限定的なものであるが、デジタル化し、オリジナルを安全に保管しつつその情報を広く利用可能なものにするには、美術史・建築史などの諸研究において

も有益であるため、デジタル化作業に着手した。

## 2. 研究の目的

本研究では、田中一松および土居次義の研究資料のデジタル化による保存活用を実施しながら、日本美術の記録のあり方と評価プロセスを明らかにすることを目的とした。田中一松と土居次義は、自らの足と、手と、眼の力を駆使して勢力的なアナログ調査活動を展開し、目を見張るような質・量の調査を実施し研究基盤を形成した。本研究はこうしたアナログ研究資料をデジタルの特質を活かして保存活用し、美術を記録するという行為そのものについても光をあて、彼らの記録を研究資料として将来的に活用することを目指した。調査ノート、写真、刊行物、各種資料などとも比較検討を行いながら、この100年間にどのように日本美術は記録され、語られてきたのかを明らかにした。具体例は枚挙にいとまがないが、美術史家がどのように作品に向き合い、研究し、評価を行ってきたかを示すために、2020年には東京国立博物館において実際の作品とともに調査ノートを出陳する展覧会を企画・開催した。本研究において、調査ノートやアナログ写真のデジタル化作業と各種資料との比較・考察により、田中と土居による半世紀以上に及ぶ文化財関係業務、日本絵画の調査研究の実態を把握することができた。個々の作品研究において有益な情報が集約できるばかりでなく、数多くの作品がどのように評価・位置付けがなされ、日本美術史が語られてきたか、という問題について考察した。

## 3. 研究の方法

田中一松による大正～昭和期のノート32冊および個人蔵のノートや手帳71冊についてデジタル化を行い、データ整理を行った。また田中一松の小・中学生時代のスケッチブックなど9点についても、保存修復処置を施した上で、高精細画像撮影を行った。これらの資料調査に加え、山形県鶴岡市に残る田中家にまつわる郷土史資料や個人蔵の資料、田中一松の叔父・田中一貞（慶應義塾大学初代図書館長）に関する慶應義塾大学所蔵資料などの調査により、これまで知られていなかった、田中一松の幼少期～青年期の事績が明らかになった。またその後の長い研究者としての営みで生成された膨大な調査記録は、それがそのまま田中が自らの中に構築していたアーカイブであるという実像を浮かび上がらせることができた。

土居次義資料については、写真資料を中心にしたデジタル化を進めた。細部を比較するために撮影された大量の写真のデジタル化の進行に伴い、調査ノートの記録との照合で評価の観点を具体的に再現することができる形を構築した。さらに土居と同時期に日本美術史研究で大きな成果を残した源豊宗の資料約500件を京都工芸繊維大学の学術コレクションに加え、整理を行った。

田中一松・土居次義の資料に、東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作（1850-1931）、平子鐸嶺（1877-1911）による調査研究ノートも加えて、4人の美術史研究者の調査ノートを中心に、調査対象となった実際の絵画作品も交えながら、2020年度に東京国立博物館の特集展示として展覧会「日本美術の記録と評価 調査ノートにみる美術史研究のあゆみ」を開催し、より広く、多くの人々に調査ノートをご覧いただく機会とした。また2021年度にはオンラインシンポジウム「日本美術の記録と評価 美術史家の調査ノート」を開催し、研究の総括を行った。本研究課題でデジタル化し、公開に支障ないと判断された調査ノートや資料（62点）については、東京文化財研究所ウェブサイトにて、画像の公開を行った。本研究で扱う資料の調査対象は古美術作品が主であり、江戸時代以前の美術の研究資料として認識されているが、田中と土居の営みは大正・昭和の近代資料とも言える。今後はこうした資料がより多くの研究者、近代の研究にも活用

してもらおうことを見据えて、オープンアクセス資料として公開することとした。

#### 4. 研究成果

今回の研究では、田中一松と土居次義の調査ノートや写真などの資料をデジタル化し、情報の集約および発信することにより、個々の作品研究において有益であるのみならず、これらの作品がどのように評価・位置付けがなされ、日本美術史が語られてきたか、という問題を明らかにすることができた。また本研究において初めて光を当てることとなった事項も少なくない。

・論文：多田羅多起子「近代京都画壇における世代交代について 土居次義氏旧蔵資料を手掛かりに」『美術研究』428 (pp.49-78,2019) では土居次義資料の中に含まれていた『中寫先生鑒證代毫記』および『(京都私立日本青年絵画共進会) 日次記』を翻刻・全文公開し、それぞれの資料が江戸から明治への過渡期にあった京都画壇において、どのように世代交代が行われていたのかを、幸野椋嶺、竹内栖鳳らの事跡から明らかにした。

・論文：江村知子「研究ノート 田中一松の眼と手」『美術研究』432 (pp.39-56,2020) では、田中一松の叔父で慶應義塾大学初代図書館長だった田中一貞についての資料や、鶴岡市の郷土資料、デジタル化した田中の手帳のデータなどから、田中一松の幼少期からの青年、奉職するに至るまでの事績を明らかにし、その後の田中の人生においてどのように影響を及ぼしているのかを考察した。

そのほか、関連する論考を下記の通り発表した。

・論文：並木誠士「和歌浦図研究-名所風俗図・試論」『デザイン理論』(意匠学会誌)76 pp.7-20 2000

・論文：並木誠士「地方美術館打出的新」『世界、東亜及多重的現代視野 台湾美術史進路』(黄蘭翔編、国立台湾美術館刊)、pp.225-260 20.12

・論文：多田羅多起子「京狩野研究と土居次義の眼 調査資料に残された研究の断片」『芸術の価値 創造 京都の近代からひらける世界』pp.94-109 昭和堂 21.03

・論文：多田羅多起子「日本におけるモレツリ法受容の一様相 土居次義による障壁画研究への応用にいたるまで」『藝術研究』34、広島芸術学会、2021年9月

東京国立博物館の特集展示として展覧会「日本美術の記録と評価 調査ノートにみる美術史研究のあゆみ」(2020.7.14~8.23)を本館14室で開催した。明治期に活躍した今泉雄作と平子鐸嶺の調査ノートとともに、田中一松と土居次義の調査ノート、合計19点を出陳し、田中一松が詳細な調査記録を残している、狩野養信模「中殿御会図」と、土居次義がその作風や表現の特徴を記録している、渡辺始興筆「農夫図屏風」を調査ノートとともに展示した。東京国立博物館で調査ノートとともに実際の作品を並べるのは初めての試みであり、反響を得た。展覧会開催期間中の総合文化展の入館者数は15,737人、同期間に開催していた特別展「きもの展」をあわせた総入館者数は86,543人であった。この展覧会で展示した調査ノートは、調査ノートの書き下し文なども読めるように工夫したウェブ展覧会も同時に公開し、ウェブコンテンツは展覧会終了後も公開を継続している。

<https://www.tobunken.go.jp/info/info200714/>

シンポジウム「日本美術の記録と評価 美術史家の調査ノート」をオンラインで開催した。発表題目は下記の通りである。

・江村知子「田中一松資料にみるコレクション形成の足跡-個人コレクターとの親交」

- ・多田羅多起子「土居次義資料にみる美術史研究者への道」
- ・並木誠士「学術コレクションとしての田中・土居ノート」

このオンラインシンポジウムには、約40名の方々にご参加いただいた。そして最終年度の総括として、特徴的なノートや資料を紹介・公開するウェブサイトを作成、公開した。

<https://www.tobunken.go.jp/researchnote/202203/>

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 多田羅 多起子	4. 巻 428
2. 論文標題 近代京都画壇における世代交代について 土居次義氏旧蔵資料を手掛かりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術研究 = The bijutsu kenkiu : the journal of art studies	6. 最初と最後の頁 49~78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18953/00008959	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 江村 知子	4. 巻 432
2. 論文標題 研究ノート 田中一松の眼と手	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術研究 = The bijutsu kenkiu : the journal of art studies	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 並木 誠士	4. 巻 76
2. 論文標題 和歌浦図研究 - 名所風俗図・試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『デザイン理論』(意匠学会誌)	6. 最初と最後の頁 7-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 多田羅 多起子	4. 巻 34
2. 論文標題 日本におけるモレッリ法受容の一樣相 土居次義による障壁画研究への応用にいたるまで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藝術研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 江村知子
2. 発表標題 田中一松資料にみるコレクション形成の足跡 - 個人コレクターとの親交
3. 学会等名 オンラインシンポジウム「日本美術の記録と評価 美術史家の調査ノート」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多田羅多起子
2. 発表標題 土居次義資料にみる美術史研究者への道
3. 学会等名 オンラインシンポジウム「日本美術の記録と評価 美術史家の調査ノート」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 並木誠士
2. 発表標題 学術コレクションとしての田中・土居ノート
3. 学会等名 オンラインシンポジウム「日本美術の記録と評価 美術史家の調査ノート」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多田羅多起子
2. 発表標題 作品調査の記録をたどる - 土居次義によるモレッリ法の応用 -
3. 学会等名 広島芸術学 会第 132 回例会 オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江村知子
2. 発表標題 日本美術の記録と評価についての研究 「田中一松資料」の保存活用
3. 学会等名 東京文化財研究所総合研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 並木誠士（黄蘭翔編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立台湾美術館	5. 総ページ数 pp.225-260
3. 書名 地方美術館打造の新『世界、東亜及多重の現代視野 台湾藝術史進路』	

1. 著者名 多田羅多起子（平芳幸浩ほか編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 pp.94-109
3. 書名 「京狩野研究と土居次義の眼 調査資料に残された研究の断片」 『芸術の価値創造』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

展示解説リーフレット「日本美術の記録と評価 調査ノートにみる美術史研究のあゆみ 」東京国立博物館 4p, 2020年
--



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	並木 誠士  (Namiki Seishi)  (50211446)	京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・特任教授    (14303)	
研究 分 担 者	多田羅 多起子  (Tatara Takiko)  (10869324)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授    (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関